



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

森喜一著「日本労働者階級状態史」

著者	小倉 襄二
雑誌名	人文學
号	61
ページ	69-72
発行年	1962-07-25
権利	同志社大学人文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000002473

森喜一著

「日本労働者階級状態史」

小倉 襄 一

I 状態史という方法

「状態史」というのは歴史を分析する一つの方法なのであるか。本書をたどりながら「状態史」とはなにかという疑問と困難を感じた。「日本労働者の創出、階級としての形成と成長、そして今時敗戦をむかえるまでに経験した八十年に近い歳月は、まことに多難曲折をきわめるものであった。原生的労働関係の支配期間はながく、絶対主義天皇制を背景とした国家権力と資本の弾圧干渉は、労働者の人格権・自由権を無惨におしひしぎ、自主性をもつ組合組織の法認も、ついに敗戦時まで与えられることなく過ぎてしまった。この歴史が、児童・婦人労働者をはじめほとんどすべての労働者の、生身からしたり落ちる汗とあぶらに書かれた文字もにじむほどの惨苦の記録となるのも当然である」(あとがき・五三九頁)と本書の執筆の意図―労働者のこうした惨苦―日本資本主義の基調、資本蓄積、独占形成・強化の要求する大量の人間労働犠牲史としての展開(五三九頁)をあとづけるもの

森喜一著「日本労働者階級状態史」

―として述べられている。この説明によっても「状態史」という方法を、とくに著者が、選択した「意図」が、はっきりと提示されたとはいえないであろう。「客観的な一つの通史」が、なぜ、「状態史」でなければならないのか。すでに労働問題史あるいは労働運動史、労働史、労働問題資料の史的分析として、本書が描こうとした基本過程についての文献は数多い。そこで、著者がとくに「状態史」として把握しようとした方法に関して、あるいは、視角・史的事実へのアプローチについての説明が欠落しているために、本書の構成について基本的な疑問と困難を感じた。労働者の歴史を、圧迫と抵抗の闘争のなかで、その質・量の変化、労働諸条件、生活状況、意識の推移を、資本主義発展の諸段階に対応させ、解釈することにおいて成立する(五三九頁)といわれるが、このことは格別に「状態史」という方法についての発言ではないうか。私自身に結論があるわけではないが「運動史」、「問題史」、「政策史」ではなくて、なぜ、本書が「状態史」でなくてはならなかったかという点が読了までつきまとった疑問である。

II 構成

本書はまず、賃労働の創出と初期の労働者状態(第一章)を本源的蓄積と賃労働者の創出(第一節)、資本の本源的蓄積と資本制産業の形成(第二節)、初期の労働者状態(第三節)において、日清戦争(一八九四―一八九五年)までの創出と状態が記述される。項目としては、封建家臣団の解体、農民層の分解、旧職人層の

解体、転化、労働者の量、給源、原生的労働関係の支配にも言及されている。視角としては、大河内一男著「黎明期の日本労働運動」(一九五二年・岩波新書)、隈谷三喜男著「日本賃労働史論」(一九五五年・東京大学出版会)の立場がほぼ採用されている。

とくに、定着性を欠如した「出稼型」家計補充を目的とする賃労働者化、初期における「働く貧民」(working poor)の下層社会的性格が強調されている。「黎明期の日本労働運動」において、日本の社会と日本の労働、前史に窮乏と民権思想、日清戦争と「下層社会」として扱われた部分、「日本賃労働史論」において、賃労働の分析視角、賃労働の原始蓄積過程の各章・項とかさなる部分であるが、この二著作の時期区分には、その問題史的なアプローチや方法によるものであるから、「状態史」としては、若干のちがった角度からの時代整序の処理が可能ではないかと考える。

近代労働者階級の形成と成長(日清戦争—第一次大戦前(一九一四年))(第二章)では、産業資本の確立、独占形成(第一節)、労働者階級の形成と労働運動の開幕を日露戦争前までに区分し(第二節)、重工業(基幹)労働者の増大と階級的発展が、日露戦争後より、第一次大戦にいたる時期について、労働者量、労働条件、労働力構成、労働者組織にわたって刻明に紹介されている。

農商務省「職事情報」(一九〇三年刊)、工場統計表、横山源之助「日本之下層社会」(一八九九年刊)、などが資料として使用されている。たとえば横山源之助の「内地雑居後の日本」から作製された「大阪地方工場の職工賃金調」、(八七頁)などによって、労働者の具体的生活内容が詳細に記述されていて興味ぶかい。とくに、生活状態(一一三頁—一一七頁)では、横山の著作によつ

て、労働者家計の紹介がある。労働運動の発展と労働政策の項では、社会主義運動の諸相、治安警察法と社会民主党の結成、工場法制定問題にも言及されている。また、日露戦争から大正二年にいたる賃金、労働力の状況、生活状態と失業、争議の様相(一六〇頁—一八八頁)は、相関資料も豊富である。第一次大戦と労働者階級として、独立の一章をおいて、独占資本主義の確立、労働者階級の成長と状態、労働者運動の新段階などに焦点をおいた記述がなされている(第三章)。ここでも、労働条件の変化と環境(二五五—二七一頁)には、労働時間、賃金、傷病率、生活状態がのべられている。大戦後の相次ぐ恐慌と労働者階級(第四章)では、

一般的危機と日本資本主義として、戦後恐慌と不況の慢性化、独占形成の前進、労働者状態と運動、労働政策がのべられ、一九一七年のロシア革命によるプロレタリア政権樹立から一九二七年の世界恐慌につらなる時期の論述である。第一次大戦後の恐慌へとよるめき続けた一〇年にみたない期間の独占体制の支配力の増大、その収奪による労働者状態の推移というのが中心テーマである。労働力の質的变化—労働構成の変化—近代化という設定での説明もなされている(三五—三五四頁)。さらに、労働者の給源の変容と需給の悪化、労働条件と生計を賃金の推移と内容にわたって、官庁統計にもとづく、分析、比較がなされている。さいごに世界経済恐慌から敗戦まで(第五章)となり、大恐慌下の労働者の、合理化と失業、労働諸条件、生計、競争体制下の労働統制やくらしの崩壊、労働者運動の衰退と消滅が要約的に述べられている。本書の重点は、第二章、第三章にあるといつてよいし、労働者状態の紹介も詳細である。なお、巻末には、統計索引、労働

働組合承諾が附されて、利用の便宜が工夫されている。

III 結語

著者は、諸事実の理論的究明に欠ける点は、準備中の次稿によると「あとがき」でのべられている。ここにも、「状態史」は、客観的諸事実の概括のこころみであるという平板な「方法」への発言がみられるようである。一方で、著者のさいきんの経験として、電気計測器の近代的大工場での「すぐれた、オートメ化された職場」の「総評全金属加盟の精銳組織のもつ強味」への、本書の

分析対象となった労働者のそれとは雲泥の差があることをつよく指摘される。大正一二年以降、関東機械工組合のチューター兼書記としての著者の体験も、ナッペ服に板裏草履、縞の着物に三尺帯、下駄はき姿に象徴されるかたちを回想して、「背広服への変化」を、歴史をたどることの内的意義においてとらえることの必要をも述べている(五四〇―五四一頁)。私は、この著者の、同時代に労働者とともに生きぬいてきた道程に主体的に連結することが「状態史」を可能にするのではないかと考える。F・エンゲルスは、「イギリスにおける労働者階級の状態」(一八五四年)の、「大ブリテンの労働者階級によせる」序のなかで、研究題目についての抽象的知識以上のもの、「わたしは諸君の家庭でみていて諸君のうちとけて語りた、諸君の抑圧者の社会的、政治的権力にたいする諸君の目撃者でありたいと思つた、わたしは、事にあたってそのとおりにした」(マルクス・エンゲルス選集2(新潮社)五頁)と語つた。ここに「状態史」の方法、その可能性が

森喜一著「日本労働者階級状態史」

語られているように思う。本書では、大正一二年以降についていえば、せつかくの、著者の、いづれも貧しく、苦しかった労働者たちの「目撃者」としての視点が「記録」のなかに充填されていないように思う。詳細な資料の提示はあるが、著者によつてのみ可能であつた「状態史」は成立していないようにみえる。類書にはみられない「状態史」への期待はみたされない。これは、著者のいわれる。客観的諸事実の概括と労働史の理論的究明といった連関とは次元のちがつた、異質の「方法」として「状態史」というものを可能にしなければならぬのではないか。

また、「状態史」としては、J・クチンスキーのぼう大な『資本主義下の労働者の状態史』叢書(全七巻一六冊)が想起される。この理論篇は絶対的窮乏化理論(新川士郎訳有斐閣・昭三四)として利用できる。クチンスキーの状態史はマルクスの資本論さらにレーニンとスターリンとのおこなつた分析に依拠しながら、資本主義下の絶対的窮乏化法則の特殊の現象形態と発展形態を研究する義務を果すことを主要課題としている(序説・二頁)とのべて、一つの立場・状態史とアプローチについての提起をしている。

「史官は記録者である。唯一の記録者である。彼が筆を取らねば、この世の記録は残らない。そのかわり、書けば、万代までも事実として、残るのである。書くべきことと、書かなくても良いことを、定めるのが、彼の役目である。書くべしと思ひ定めたことは、如何なる事が有ろうとも、書かねばならぬ」(武田泰淳・司馬遷―史記の世界・昭三四・三三―三四頁)。前後の文脈から切斷して、この引用をするのはよくないが、歴史分析にしても、

Delinquency and Opportunity: A Theory of Delinquent Gangs

私が著者に期待する「状態史」も、このような「記録」の構造をもつものではないかと考える。とくに、本書の著者は、「生活」(岩波新書)。「都市の貧困」(一九五八年・三一新書)「生活費」(三一新書)などによって、働く人々の貧しき、みじめさを描き出して、何が、記録するべきかを、きびしく決定してきている。本書が「状態史」であることから、とくに、第四章、第五章を中核として、資料の選択、設定について、あるいは、理論の構成について、著者の「目撃」による扱いを次稿に期待したいものである。労働者階級の存在状況の通史として、提示された各歴史段階の資料、比較データは、豊富であるから、本書によって得られる研究上の便宜は大きいものがあることはいうまでもない。

「日本労働者階級状態史」一九六一年七月

B5版・五四八頁・定価二、一〇〇円

森 喜 一 著 (一九〇〇年生)

三一書房刊

Richard A. Cloward & Lloyd F. Ohlin

Delinquency and Opportunity:
A Theory of Delinquent Gangs

——非行問題研究におけるアノミー論の展開——

井 垣 章 二

現代犯罪学は、その原因論にかんして、二つの流れの合流過程にあるといわれる。一つはC・R・ショー、E・H・サザーランド等シカゴ学派によって代表される非行の文化理論であり、もう一つはR・K・マートンによって代表される、非行への圧力の源泉としてのアノミー論である。前者は、社会的分化の生態学的過程にとらわれ、その焦点を小地域(スラム)に固定し、非行に至るためにはその(それを習得し実行する)機会、すなわち非合法的機会にさらされることを強調し、一方、後者は、全体社会的バックスぺクティブに基づき、非行に至るためには文化的目標達成のための合法的機会接近の可能性が限られていることを強調した。人はそのおかれるところによって、合法的機会接近にも非合法的機会接近についても差異を有するに相違ない。かくて、逸脱行動の起源にかなする適切な説明のためには、両者は統合されるべきはずのものであった。本書は、コーヘン(A. K. Cohen)による